

【一に養生、二に看護（看病）、三四がなくて五にクスリ】

五十代半ばの男性が来られました。

「先生、健康診断を受けたところ、血圧が高いです、すぐに治療を受けてください、といわれました。脳出血が怖いので、早く血圧を下げてください。」

ずいぶんせっちな方です。

「わかりました。ところで、どのくらいの血圧なのですか。」

「上が 160 で、下が 100 だったと思います。」

「それは、いつの血圧ですか。」

「健康診断の時です。」

「でも、今日の血圧は、130 と 84 ですから、それほどでもありませんね。」

「先生、でも早く薬を飲まんと、どんどん上がっていくんと違いますか。」

「そんなことはないですよ。」

患者さんは、ちょっと腑に落ちないなあ、という顔をしておられます。さらに、私は話を続けます。

「ところで、夕べは何時ころに休まれましたか。」

「午前 1 時は回ってましたね。」

「ちょっと遅いですね。お仕事の関係ですか。」

「いやいや、面白いテレビ番組があつてね、ちょっと遅くなったんですわ。まあ、いつものことですが・・・。」

「(いけませんね、と心で思いつつ) ○○さんは、タバコを吸われますか。」

「一日に一箱か、まあそんなとこですね。先生、そんなことより、早く血圧を下げるお薬を出してくださいよ。」

私は、患者さんの脈を診たり、舌を診たりしながら（漢方診療の実際については、改めておはなしさせていただきます）、いろいろとその患者さんの人となりや生活全般について理解しようと努めます。患者さんは、さっとよく効くお薬を出して欲しいと思っておられるわけですが、東洋医学の治療では「一に養生、二に看護（看病）、三四がなくて五にクスリ」といわれるように、お薬がよく効く状況を整える努力が医師の側に求められます。